

栗野鳳先生をお送りする言葉

広島大学平和科学研究センター主任

山 田 浩

栗野鳳先生は、昭和58年4月1日をもって、広島大学を定年退官されることになりました。先生は昭和53年4月、シリア駐在特命全権大使を最後に外務省を退職され、直ちに広島大学平和科学研究センター教授、翌年4月には研究センター長に就任されました。以後一貫して研究センターの活動に専念され、その発展に大きく貢献されました。先生の退官に当たり、その御功績を思い、温厚で度量の広い御人柄を偲ぶとき、心からなる愛惜の情を禁ずることはできません。

栗野先生の数多い御功績のうち、何といっても特筆すべきは、日本はおろか世界にわたって、研究センターの存在や活動についての評価を高められたことだと考えます。これにはもちろん、前出のシリア大使をはじめ外交官としての長い経歴と能力が、大きく関係していることはいうまでもありません。

そのことは、研究センターが昨年6月の第二回国連軍縮特別総会で演説を許された23の平和・軍縮研究組織の一つに指名されたこと、また日本の平和研究と平和研究組織を代表するかたちで、国連という大舞台の演説で聴衆に深い感銘を与えられたことに如実に示されています。さらに先生が、昭和55年4月から約9か月間、国連難民高等弁務官事務所アジア地域調整官特別顧問としてタイで活躍されたこと、あるいは昭和57年8月末からインドネシアのジャカルタで開かれたユネスコ主催の第二回軍縮教育セミナーで報告されたことなども、研究センターの評価を高める上で大いに役だったと考えられます。

日本国内における研究センターの活動についても、栗野先生の貢献は大きかったといえます。研究センターの研究活動としては、国連大学の研究プロジェクト「人間と社会の開発 ― 目標、過程および指標」への参画、昭和51年以降毎年もたれてきた広島大学平和科学シンポジウム、内外の研究者を招待しておこなう研究会などがありますが、先生はこれらの企画や実施を中心となって推進されました。また昭和54年11月以降今日にいたるまで、日本平和学会理事として、平和研究の分野での御尽力もけっして軽視されてはなりません。ここでも、長い外交

官としての御経験からくる透徹した国際感覚が、もろもろの御発言や分析の底に鋭く働いていたことを痛感させられます。

先生の御経歴からすれば、とかく堅苦しい御人柄を想像しがちですが、実際はきわめて温厚で包容力の大きさが印象的です。積極的に発言される御意見を聞いていまして、その内容に官僚的な杓子定規なところはなく、柔軟な視野の広さに感服させられます。私なんかいつも思うことですが、日本の大学でも外国のように学外の実務家との人事的交流が望ましく、この点で栗野先生の場合は、一つの典型を示しているのではないのでしょうか。シリア大使をおやめになったとき、いろいろ他に進路がおりになったと聞いていますが、あえて大学人を選ばれた御決断に深い敬意を表したいと存じます。

これまで栗野先生が、平和科学研究センターおよび広島大学全体に対し寄せられた御尽力について、最後に改めて心から感謝いたしたいと存じます。今後ともますます御健康に留意され、御活躍されることをお祈り申し上げ、先生をお送りする言葉といたします。